

日本仏教の歩み

小林正博

※本稿は、東洋哲学研究所主催「一般公開講座」(2009年9月29日、東京・八王子市)の要旨を筆者がまとめたものです。

1 仏教の日本化

日本仏教の歩みを述べるといふことは、「仏教の日本化」への道を語ることもありませう。外来の宗教である仏教が、日本で定着・発展を果たすことができたのは、土着の信仰を超える豊富な教義を有していたことが大きいのですが、その反面、各時代の政治的、社会的、

宗教的背景の強い影響下にあつて、時代即応の体質変革を余儀なくされ幾多の曲折をたどってきたことも事実です。

こうして生き残ってきた現代日本の仏教に対して、「大葬送儀礼体系を媒介とし、人の死に依存する極めて日本的な仏教と化してしまつた」との仮借なき批判が浴びせられています。この葬送儀礼を主体とする姿は、インドの仏教とも異なり、中国仏教とも朝鮮仏教とも違う独特のものであります。この日本仏教のありようを「仏教の日本化」と称するのです。

2 仏教公伝以前の日本人の宗教観

六世紀の中頃、仏教は朝鮮の百濟から正式に公伝しますが、まずそれ以前の日本人が持っていた宗教観をつかんでおく必要があります。厳密にいいますと、日本という国が成立したのが七世紀後半ですから、倭人の宗教観というべきですが、これは主に次の三点に整理できると思います。

①アニミズム 人間の力を越えた靈的存在を信じる
精靈信仰 ②タマ信仰 氏族や先祖の靈魂⇨タマへの畏敬の念を込めたマツリゴト(宗教儀礼) ③シャーマニズム 災異や恩恵を与える自然神と人間界を取り結ぶ巫女的存在

ただ、先土器文化、縄文文化、弥生文化そして古墳文化と一万年以上にわたる日本列島に住む人々の宗教観を把握することは、文字資料に事欠き、遺跡・遺構・遺物も断片的であり、必ずしも明確というわけではありません。実は、この三点は西暦以前の中国の人たちが持っていた宗教観と酷似しているのです。というこ

とは、古来より日本人が持ちつづけてきたとされる日本人独自の精神的古層——これを宗教的次元で古神道とか原始神道と表現する場合があります——その実態は渡来人の宗教観を母体として形成されたものというべきなのかもしれません。

3 古代——朝廷・貴族層に普及

『日本書紀』の公伝記事が伝えるように、「仏」は「蕃神」、すなわち隣の国の神として見なしていたことから、ある種の神祇観が機能していたことがうかがえます。

通説に従えば、仏教受容の道を開いたのは、親仏派の蘇我氏と排仏派の物部氏の政争の結果、渡来系の蘇我氏が勝利したことが大きな要因であり、聖徳太子を日本仏教の祖と位置づけ、この功績が称えられています。しかし蘇我氏は渡来人ではないとか、物部氏も河内の淡川に造寺していたとか、聖徳太子はいなかったという反論もあつて、議論は紛糾していますが、飛鳥時代(七世紀前半)に仏教が定着することは論を待ちません。この時代の特徴は渡来系の有力氏族が中心にな

って伽藍建立・仏像造立をしており、私の寺すなわち氏寺が次々にその偉容を現わし人々の耳目を驚かせます。堅穴住居に住んでいた人々にとってはそれこそカルチャーショックが起きたのではないでしょうか。「見えない神」に対して「見える仏」、この違いも仏教受容に有利に働くこととなります。この時代の寺院建立は有力氏族が推進しており、そういう意味で飛鳥の時代は「氏族の仏教」と位置づけられます。

次の白鳳時代（七世紀後半）に天武、持統の夫婦により、倭が日本に、大王が天皇になり、日本最初の本格的な都・藤原京が造営され、仏教は国家護持の宗教として受け入れられていきます。天皇家も主体的に仏教を取り入れ、私寺に対して公の官寺造営に着手していきます。法隆寺が大王家の氏寺から官寺に昇格したのもこの時代でした。官僧が正式に国家によって輩出され国家主導の仏教受容の時代を迎えました。白鳳期はそういう意味で「国家の仏教」の時代だったのです。

「天皇の仏教」へと特化されるのが奈良時代（八世紀）です。そのシンボルは東大寺の大仏です。華嚴経の「一

即一切」「一切即一」の教義にもとづき、東大寺は総国分寺とされ、六十六箇国それぞれに国分寺が建立されることになりました。律令制度を基とする地方支配の精神的根拠として仏教が利用されていきました。これを主導し発展させていったのは、自らを「三宝の奴やつこ」を主導し発展させていったのは、自らを「三宝の奴」と称した聖武天皇と光明皇后、そして娘の孝謙天皇の三人です。そういう意味で奈良時代は「天皇の仏教」として国家中枢に定着するに至ります。

藤原氏の菩提寺である興福寺に法相宗、東大寺に華嚴宗、唐招提寺に律宗、大安寺に三論宗、その他俱舎宗、成実宗の六つを合わせて南都六宗といいますが、いずれもその淵源は中国で成立した宗派です。

その後、仏教界には、律令制の庇護のもと腐敗堕落する僧も現われ、法王禪師にまで登り詰め次の天皇位を窺おうという道鏡のような僧が出現し、奈良の朝廷は乱れていきます。

そこからの脱却を図るべく、桓武天皇が京都に遷都し平安時代の幕が開きます。桓武天皇の平安京は南都仏教の移転を認めず、わずかに都の南端に東寺と西寺

を建てただけでした。あくまで新しい都にふさわしい
仏教の出現を期待していたのです。いうまでもなく、
これに応えたのが最澄の天台宗と空海の真言宗でした。

二人は日本仏教史上、最大のライバルといつてよく、
その後の仏教界の両輪として仏教史を綴^{つづ}っていくこと
になります。最澄が開いた比叡山延暦寺からは、のち
に法然・栄西・親鸞・道元・日蓮という鎌倉新仏教の
祖師たちが輩出し、空海の真言密教は平安、鎌倉仏教
の中心的役割を果たし、政治・文化に多大な影響を与
えていきます。平安時代は江戸期二六〇年より、はる
かに長く四〇〇年つづきますが、中期以後には末法思
想とあいまって浄土信仰も広く浸透していきます。藤
原頼通の平等院鳳凰堂は有名ですが、それよりスケー
ルの大きい父・道長の法成寺、院政時代の白河上皇の
法勝寺なども、この世の極楽浄土を現出する阿弥陀仏
信仰の象徴でした。

平安仏教は朝廷・貴族に受け入れられ、名刹寺院の
トップは皇室や摂関家からの天下りであり、まだまだ
仏教が庶民層にまで信仰されるには至っていません。

仏教界は朝廷・貴族に対し鎮護国家、除災招福を主な
職掌とし、経済的には多くの莊園を有し、武力的にも
僧兵を組織するなど権門勢力の一角を占めていました。

4 中世・近世——新仏教の成立と民衆化

貴族化した仏教の体質に批判の一矢を放ったのが鎌
倉新仏教でした。法然の浄土宗、栄西の臨済宗、親鸞
の浄土真宗、道元の曹洞宗、日蓮の法華宗、一遍の時
宗というように、現在の既成仏教の中核を成す宗派の
開宗が鎌倉期に集中したところから、日本仏教史の画
期を形成する重要な位置づけがなされ、戦後「新仏教
中心論」が家永三郎・井上光貞らによって提唱され、
定説となっていました。これは新仏教の特質が選択・
専修・易行・民衆救済であるのに対して、旧仏教は兼学・
雑信仰・戒律重視・貴族仏教であると明確に区分した
のです。しかしこれに対して黒田俊雄は『日本中世の
国家と宗教』（一九七五年）の中で新仏教中心説を批判し、
顕密体制論を主張します。鎌倉仏教は平安期の密教隆
盛の流れを継承しており、他の顕教（経典に顕された教え

に依拠する宗派は依然として密教色をその体質に取り込み、旧仏教中心による体制が存続していると考えられるものです。密教を中心とする旧仏教は主流、新仏教は異端的存在という図式を提示し、今はこの説の方が有力視されています。たしかに新仏教が大きく発展するのは室町時代になってからで、鎌倉時代は弱小集団にすぎなかったのです。

新仏教は室町期以降、庶民層に広く受容されていきますが、そのことと鎌倉新仏教の特質を説明することとは切り離して考える必要があります。室町期の新仏教は、概して祖師の教え、生き方をそのまま弘めたのではなく、庶民受けする教義へと改変を行なうことで布教に成功しているからです。祖師たちがほとんど言及しなかった葬送儀礼体系の確立もその一例です。

室町時代は、足利政権によって京都・鎌倉に敷かれた五山制度を核として臨済宗が大いに隆盛します。しかし絶大な権勢を誇った三代将軍・足利義満以降は、將軍の力も影をひそめ、一四六七年に起きた応仁の乱以降、地方支配に力点を置いた守護大名が台頭し、い

わば地方分権的な時代に入っていきます。そうした中、注目すべきは農耕技術の発達、荘園制の解体による惣村の成立により、農民、町衆が経済的にも豊かになり発言力を増し、歴史の舞台に登場してきたことです。一揆が多発していくのも十五世紀以降で、守護大名の中には一揆によって国を奪われ、一揆勢力が支配する国が成立するほどでした。

豊かになり、村の自治権を獲得した民衆たちが仏教界に求めたものは葬送儀礼の執行でした。守護大名どうしの争いが激化する中、安定的な経済基盤を求めていた仏教界にとって、民衆の仏教希求の動向はまさに渡りに船だったので、こうして仏教界は本格的に民衆に降りていくこととなります。これによって仏教の民衆化が実現したといつてよいでしょう。しかしその実態は「死」と「死以後」にまつわる葬送儀礼を媒介とする民衆化だったので、

時代は、守護大名も下克上により戦国大名に取って代わられ、戦国時代を迎え、そこから抜け分け出でた信長、秀吉の織豊政権は有力寺院の僧兵、一向一揆を

壊滅させ、力づくで仏教をねじ伏せていきます。さらに徳川幕府は仏教界統制のため各宗ごとに本末体制を整備させ、その上に寺社奉行を置いて仏教界の封建体制を確立しました。さらに民衆掌握のため日本人全員を寺院の檀家としてくり、檀家制度を成立させ、ここに日本人はみな仏教徒になったのです。しかし檀家制度は、必ずしも民衆の純粋な信仰心を尊重するものではなく、なかば強制的に檀家寺を決めさせるものだったのです。今も各家庭に伝わり代々受け継がれている「家の宗教」の成立には、こうした背景があったことも押さえておく必要があります。

5 近現代——脱「仏教の日本化」

近代に入り明治政府は天孫たる天皇を中心とする神道を創出し、皇民への神道教育を徹底していきます。特に太政官の神仏分離令に端を発した廃仏毀釈運動により、還俗する僧、売却される寺塔が続出し、仏教界はかろうじて葬送儀礼にしがみつき余命を保つような状態に陥ってしまいます。これまで神道より優位に立

って歩んできた仏教は完全に神道の膝下につき、神道を称える教義的改変をも余儀なくされていきます。近代宗教史はまぎれもなく神道が主役であり、仏教はそれを引き立てるエキストラのような役回りを強いられただのです。そして大日本帝国の侵略戦争に協力・加担し共同歩調をとった結果、敗戦により仏教界は滅びゆく帝国と命運を共にすることになります。

戦後、仏教界の動向で大きな変化は、在家が在家を教導する教団が、人の「死」ではなく「生」を真正面から取り上げ布教に成功したことです。

そして二十一世紀に入り、青年層の宗教ばなれが顕著になっており、彼らが老壮世代になった時のことを考えると、日本仏教の将来は暗雲が立ちこめていると、いつて過言ではないでしょう。日本仏教はどうあるべきなのか、脱「仏教の日本化」を発想の始点として、行動する仏教者が陸続と輩出することを期待するものです。

(こばやし まさひろ／東洋哲学研究所主任研究員)